

Title	マーベル・タイルコート著 一八五一年以前におけるランカシアおよびヨークシアの機械工学校
Sub Title	The mechanics' institute of Lancashire and Yorkshire before 1851, by Mabel Tylecote
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.9 (1960. 9) ,p.794(56)- 797(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19600901-0056
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600901-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600901-0056</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マーベル・タイルコート著

『一八五一年以前におけるランカシア

およびヨークシアの機械工学校』

(Mabel Tylecote; 'The Mechanics' Institute

of Lancashire and Yorkshire before 1851,

1957, pp. x+346, Manchester Univ. Press.)

十九世紀の前半、すなわち一八〇〇年から一八五〇年までにイギリスは、世界史の歩みのなかで、他のいかなる民族もなしえなかつた偉大な事業をなしとげた。産業革命とこれにともなう資本主義体制の樹立である。しかしこの五〇年間におけるイギリス産業社会の変貌は、およそ数世紀の変化にも匹敵するほどすさまじいものであり、階級的対立と抗争の激化、新思潮の抬頭と旧思想の没落を必然的にともないながら、技術的変革を楨杵として強力におしすすめられたものであった。この過程において、新興資本家階級の勃興と対照的に独立小生産者の衰滅、労働者階級の貧困化が深刻な社会問題となり、これが対策として上からは工場立法や救貧法などの社会政策、下からは労働組合運動が重要な役割をになうに至った。そしてそのはげしい社会変革の過程のなから、労働者階級の「新しい型」が形成されたのである。いわゆる機械工学校の運動は、このよ

うな新しい時代の要請によって生まれた労働者階級の自助的な組織であったということが出来る。

本書の著者タイルコートは、その「はしがき」のなかで、つぎのようにのべている。「わたくしがとりかかった仕事というのは、ランカシアおよびヨークシアの繊維工業地帯において、機械工学校の発展を考えることであつた。ここでは、それらの数は非常に多く、その建設から一八五一年までの間に、もっともはっきりと根をおろしていたようにみえる」と。そしてとくに一八五一年までと限定した理由については、「それは、形成期および先駆的な活動の時期において、機械工学校を物語ろうとする企てを考慮にいれ、また、大博覧会以後、国家が一般的技術的教育をおしすすめようとする新しい努力の門口に立ち、自発的な努力が次第に、政府の活動にとって代られようとしたとき、機械工学校が保っている地位を評価しようとする企てを考慮にいれているのだ」と。

しかし筆者がこの書にもっとも心ひかれたのは、(一)機械工学校が、労働者教育の上で、どのような役割を果たしたか、(二)それは当時の労働組合運動や社会主義運動とどのような関係にあつたか、(三)とくにチャーチスト運動との関係、(四)この運動を指導した人々とこれにひきいられた労働者の階層などの諸点であつたが、本書を読むことによって、直接にはこれらの疑問にたいする充分な回答をうることはできなかった。けれども、本書は、英国における成人労働者教育にかんするきわめて貴重な労作であると思う。つぎのような内容

から成っている。

一、機械工学校の初期の歴史

二、運動の目的と理想

三、ランカシアおよびヨークシアにおける起源と発展

四、教育的および社会的諸問題

五、マンチェスター機械工学校

六、ハッドースフィールド機械学校

七、ケイリー、ハリファックス、ブラッドフォード、スタリブリ

ッジおよびアシュトン・アンダー・ラインの機械工学校

八、一八五〇年における運動の状態と成果

いわゆる機械工学校の先駆的な形態ともいふべきものの成立は、十八世紀にすでに存在していたといわれるが、そのもっとも初期のものは、スピットルフィールド数学協会(The Spitalfield Mathematical Society)であつて、ここでは織工や小商店主などが一七一七年当時から、毎土曜日に集まり、数学の問題を解いていたといわれる。しかし当時はまだ産業革命の影響が浸透していなかつたので、この団体も、そしてまたその後のロンドンの機械工学校も多分に中産階級的であつた(p. 3)。労働者教育の本格的な発展は、まず一七八九年のバーミンガム日曜協会(The Birmingham Sunday Society)の建設にはじまり、それはやがてバーミンガム同胞協会(The Birmingham Brothers Society)として再組織されたことにはじまったのである。その目的は、初歩的な教育と労働者にと

って一般に有用と思われるものは何でもこれを教授するにあつた。

このような試みは、当時グラスゴウにおいても行なわれ、グラスゴウ大学の自然哲学(Natural Philosophy)の教授であつたジョン・アンダーソン(John Anderson)の努力によってつくられたアンダーソン学会(Andersonian Institution)において、ヨークシアの自然科学者ジョージ・バークハック(George Birkbeck)は、労働者教育に専心した。第一章は、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのバークベックの指導するグラスゴウ機械学校の運動を中心として初期の運動の模様についてのべ、さらにロンドンの機械工学校についてふれている。ここで注目すべきことは、ロンドン機械工学校の場合、これを支持した人々が、ジェームズ・ミル(James Mill)、デーヴィッド・リカード(David Ricardo)、ウィリアム・ゴズワート(William Cobbett)、フランシス(Francis Place)、ヘンサム(J. Bentham)、ホップハウス(J. C. Hobhouse)、バーデット(Sir Francis Burdett)であつたといわれるが(p. 19)、これらの人々の思想や信条がそのまま、この初期の運動の性格を物語っていることである。すなわち、ウィック左派、云いかえるならばブルジョア急進主義者の上からの啓蒙政策であつたことである。

この機械工学校の目的が、成人労働者にたいする技術教育とともに、健全な娯楽の提供を目的としている限りにおいて、開明的な資本家はこれを支持したのであるが、労働者階級の知的および道徳的水準の結果をひき上げることによって、支配階級に反抗する大衆を

つくり出すことを彼らは極度におそれた (p. 53)。これにたいし、この運動の先駆者たちは、労働者階級の教育の重要性を力説し、社会体制を暴力的に破壊しようとするのは、大衆のみじめな状態、悪徳および偏見であって、大衆の間にひろく教育を普及させ、無知を一掃することが必要であると主張した。ヘンリー・ブルীগム卿 (Lord Henry Brougham) は、つぎのように書いたといわれる。「真の知識は、騒動や不信を助長するものではなくて、その進歩は、自由と寛容の前ふれなのだ」と (p. 45)。第二章を読むならば、われわれは機械工学校の教育が、労働組合運動やチャーチスト運動のような政治運動とはほとんど相容れないものを含んでいたことがわかる。「ある独学の機械工は、つぎのように論じた。『独学の機械工は、教育というものが、労働者にたいしてストライキの無意味を明らかにするであろう』と。『産業の自由』、「私有財産の安固」、このふたつが、労働者教育の基本的な原則であったとすれば、この運動は最初はむしろ反動的側面をより多くもち、資本家的経営秩序に従順な機械工を養成しようとする目的をもっていたことを知らなければならぬ。『機械工学校の会員は、労働組合にはほとんど関係がなく、あらゆるい政策や粗雑な思想から関係を絶とうとしていた』 (p. 58) といわれるが、運動それ自体としては、労働者階級の知的道徳的水準をひき上げるといふ進歩的な役割を果すべきであるにもかかわらず、その反動的な側面をさけることができなかったのは何故か。第三章において、著者は、よりくわしくその性格

を追求している。著者の言わんとするところを要約するに、ランカシアおよびヨークシア地方に、この機械工学校の運動が根をおろさせた諸条件として、(一)劣悪な労働条件に苦悩する無智にして貧困な労働者大衆の絶望的な反抗にたいする資本家階級の恐怖、(二)より人道的な経営者および博愛主義者の、北部諸都市における悲惨な状態にたいする認識、(三)繊維産業部門における機械の導入と技術的変革の結果、資本の側は労働者が智的ならびに技術的に高められることの必要性を痛感したことである (p. 53)。これらの諸条件をみれば、この運動が、主として資本の内部的要求に副ったものであり、労働者の眼を階級的対立という歴史的現実からそらせる役割を果していることは疑いえないところであって、その証拠として著者によれば、「これらの学校の非常に多くのものが、その創立を資本家の努力に負っており、最初からかなりの財政的な援助をうけていたといわれる (p. 55)。その経営管理も、ストックポートでは『有力な製造業者』が選ばれ、デウスベリーでは『公衆のなかのほんとうに自由なそして頭のひらけた部分の仕事』であった。」

古典的な形態の機械工学校は、講演部 (lecture department) 学級部 (class department) および図書館 (library) となっており、ランカシアおよびヨークシアに集中していた。興味深いことは、ランカシアにおけるよりもヨークシアのウェスト・ライディングの方が圧倒的に多かった (ヨークシア全体で一五〇ほどあったが、その大部分をしめる) という事実である (p. 56)。この理由は、

たといえば著者は、マンチェスター機械工学校の場合、一八四〇年代には機械工はそのメンバーから姿をけし、事務員やその他の職種の人々が増加したとのべているが (p. 139)、筆者がもっとも関心をいだいたのは、この機械工学校は、一八五〇年代のあのニュー・モデル・ユニオンの中核となった合同機械工同盟とどういう関係にあったのだろうかという点である。オーエンの社会主義とチャーチスト運動の背後で着々と発展していたこの運動が、ウィクトリア型組合としての機械工同盟の成立のためにほとんど何の貢献もなしえなかったのだからだろうか。

すぐれた実証的な研究であったにもかかわらず、筆者はウィクトリア型組合の生成、とくに合同機械工同盟の生成にまつわる疑問の解決を、本書に求めたのであったがえられなかった。この点を除けば、本書はやはり英国産業革命史にかんする最近の力作のひとつにかぞえられるであろう。

「クシア」毛織物業「マニユファクチャ」形態「クラフトマンシップ」&「ランカシア」綿紡績業「工場制工業」近代的プロレタリアートとの比較と、インスティテュートのメンバーを構成している大部分が手工業 (handicraft trades) に従事していた労働者であった、工場労働者は非常に少なかったという事情とを考慮にいれるならば、明らかであろう。かくして一八四〇年代には、ヨークシアおよびランカシアには、機械工学校の同盟が成立するのである。しかしそれにもかかわらず、この運動は、四〇年代を境として全体として衰勢に傾いてゆくのである。その理由を著者は第四章において追求する。衰亡の原因として著者は、資金の不足、講師の払底などの理由に帰しているが (p. 98)、当時、チャーチスト運動などに勤労者大衆がひきつけられておったことを考えると、その背後にやはり、労働者階級の政治的関心の昂まりと政治問題を排撃するインスティテュートとの間の矛盾なども、当然考慮されねばならない。しかし著者は、とくにこの問題に答えてはくれない。

著者はつぎに、マンチェスターをはじめ、各地の機械工学校について、その成立の歴史にまつわる諸事情を、豊富な資料を縦横に駆使して克明に描いている。これについてくわしく紹介を試みる余裕はないし、またその必要もないと思うが、ただ問題は、機械工学校の歴史的な過程を詳細に究明しようとする著者の努力は、却ってあまりに網羅的でありすぎ、事実の龐大な整理という点のみが表面に出て、問題の重要な点が何処にあるかを見失わせる憾みがあるので

一九六〇・七・一〇  
(飯田 鼎)